

# 保田與重郎『戴冠詩人の御一人者』の構造可視化

—日本語文章の絵解き—

谷口敏夫

## 0 目次

- 1 はじめに
- 2 調査の目的と方法
- 3 文章地図の準備
  - 3.1 用語の分類
    - (1) 人名の概略
    - (2) 事項名（作品・専門用語など）の概略と分類
    - (3) 用語の傾向
  - 3.2 事項と人物の認定
    - (1) 事項・人物の名寄せについて
    - (2) 事項・人物の概説
- 4 クラスタ分析
  - 4.1 事項・人物のクラスタ分析
    - (1) 日本武尊 {文學 {悲劇、英雄}、詩人}
    - (2) 内村鑑三 {高山樗牛、明治の精神}
    - (3) {岡倉天心、明治} 精神
  - 4.2 文章地図（事項・人物）に表れた小概念
    - (1) 文章地図全体の概略
    - (2) 文章地図の通時的分析
    - (3) 文章地図の共時的分析
    - (4) その他の特異なパターン
- 5 まとめ

## 1 はじめに

評論家保田與重郎『戴冠詩人の御一人者』は、谷崎昭男解題の講談社保田與重郎・全集解題によれば初版が昭和十三年九月二十二日で、東京堂刊とあった。本稿ではテキストとして、講談社全集の第五巻を元にした新学社の保田與重郎文庫（3）を使った。

さて、先回の『後鳥羽院（増補新版）』と同じく、『戴冠詩人の御一人者』は書き下しの長編評論ではない。しかし読者はこの図書を最初に手にしたとき、そのよ

うな委曲なく巻頭から巻末に向かって読み、それが数度にわたれば、保田の戴冠詩人とはこの目次・各章にあるような単行図書であると、それが既定の事実となる。また、保田自身もこの形態で戦前、戦後を通して初期日本美学の典拠と見なしてきたのだから、各篇の初出およびその前後を詳しく考えることは、書誌学上では必要なことであるが、文藝一般ならびに本稿の絵解きからは、この形態や順序を固定・定稿と見なすのが妥当と考えた。

このテキストに付記するなら、『戴冠詩人の御一人者』は『和泉式部私抄』と同じく戦後、昭和四十年代になっても極度に入手し難い古書であった。しかし各篇が青年期の感性を刺激し、今に至るもこれをもって保田全著作の五指に入る名著と考えている。「戴冠詩人の御一人者」は言うに及ばず、「大津皇子の像」「當麻曼荼羅」「雲中供養佛」「建部綾足」「明治の精神」などが鮮烈な読書経験として往時に残った。保田による「日本文学」のわかりやすさにおいては、初期『日

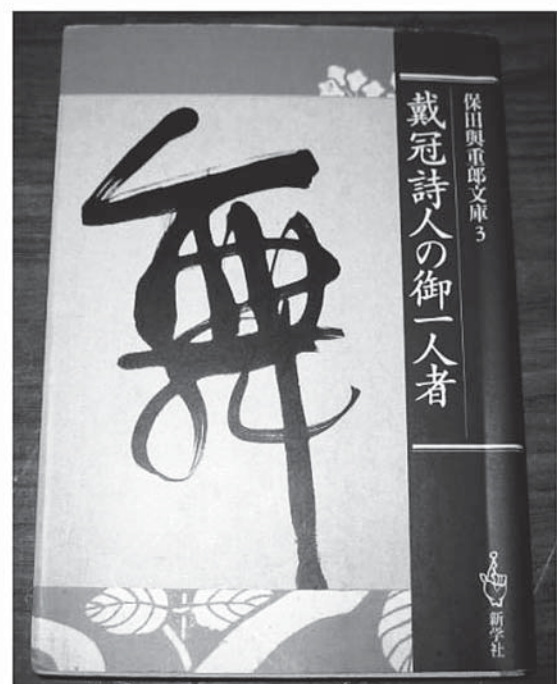


図1 戴冠詩人の御一人者（新学社文庫）

本の橋』よりも、この著の方が具体的でよいと考えている。

本論は保田の『戴冠詩人の御一人者』を題材に、「このテキスト中の用語を抽出し、その傾向を分析し文章地図にまとめた。その用語の一つ一つには保田の肉声が宿っているが、恣意に依らない再現性を伴う方法論で分析をした。<sup>\*1</sup>」と言える。

## 2 調査の目的と方法

本論の目的は保田の特色ある初期評論『戴冠詩人の御一人者』を、用語の頻度によって可視化し、保田の意図した独自の歴史・文学・美学の構造を考察することにある。以下に、テキストの目次を示す。既に1で述べたがこれは書き下ろしではなくそれぞれの初出情報を持つが、本稿目的から割愛した。なお（）内数字は文章量として頁数をいれた。

- 0. 緒言 (5)
- 1. 戴冠詩人の御一人者 (56)
- 2. 大津皇子の像 (19)
- 3. 白鳳天平の精神 (15)
- 4. 當麻曼荼羅 (23)
- 5. 齋宮の琴の歌 (7)
- 6. 雲中供養佛 (19)
- 7. 更級日記 (26)
- 8. 建部綾足 (14)
- 9. 饗宴の藝術と雑遊の藝術 (13)
  - 二人の世界人
  - みはしのさくら
  - 勝利の悲哀
- 10. 明治の精神 (62)

本稿ではこれらを「章」として扱う。各章は保田の20代に書かれたものだが、容量にはばらつきがあって、1の「戴冠詩人の御一人者」が文庫頁で56、最後10の「明治の精神」が三つの節に別れ、総数で62頁となっている。この分量からみても、最初と最後の章が圧巻と言える。特に9の「饗宴の藝術と雑遊の藝術」とは内容的に「明治の精神」の後書きともとることが

できるので、二つを合計すると75頁にもなり、この図書全体の性格がうかがえる。あらかじめまとめておくと、この図書は〈日本武尊にこと寄せた日本の近代論〉であろう。この場合、日本武尊は民族の青年期、明治時代は近代日本の青年期を指している。

この考察を明確にするために、あらかじめ粗く抽出した用語群を分類し、その傾向から保田の鍵語や、人名を正規化（名寄せ）し異同をただした。さらに用語間のクラスター分析をし、デンドログラム（樹形図）をつくり、図に現れた用語の配列をもとに文章地図（注：用語頻度の等高線グラフ）を作成した。文章地図上に現れたパターンはそれぞれテキストにあたり、小概念として確定した。つまり、図書全体を構成する小さな概念の相互の関連を可視的に把握することが、本論の目的である。

従来と同じく、便宜的にパターンの説明に際し島、ないし群島という言葉を使った箇所もあるが、これはテキスト・文章全体を大海原とみなし、そこに点在する小さな概念集合である用語群を島とイメージしたことによる。

テキストは新学社2000年『保田與重郎文庫3 戴冠詩人の御一人者』で、総頁が260あり、テキスト総量は187200文字（18行x40字x260p）、400字原稿用紙換算をすると470枚の作品である。以下、この本文引用にあたり「～」は省略を意味する。実験に使用したKT2システムは自製である。

## 3 文章地図の準備

まずテキストから、KT2システムで様々な用語を粗く取り出した。抽出した用語数は19303件、その異なり語数は7718種となり、用語の繰り返し率（7718/19303）は39.98%であった。最初に、これらに手を加えずに上位頻度数を示す用語を整理したのが表1である。この表からテキストの傾向、語彙、用字用法の全体像がつかめ、そこからいくつかの工程を経てより精緻な文章全体の地図ができる。すなわちテキストの中に含まれる用語分布のパターンを可視化することになる。

### 3.1 用語の分類

ここ3.1では人名や事項名について、表1であらか

\*1 保田與重郎『日本の美術史』の構造可視化／谷口敏夫。京都光華女子大学研究紀要 第46号（2008）、p102

じめ概略を把握し、これを元にテキストの概略を考察する。さらに後述3.2の精緻な名寄せ作業を行うことになる。表1は粗い抽出によって、頻度12以上の用

語209件をまとめたものである。全体の異なり数が7718種あったので、頻度上位2.7%の表といえる。表1に観られるテキストの特徴について概略を記す。

表1 用語の頻度 (12 頻度以上の用語、209/7718 異なり上位 2.7%)

頻度	用語	30	宣長	19	見出	14	封建
372	日本	30	象徴	18	變革	14	蕪村
244	精神	30	家持	18	崩壊	14	負目
129	明治	30	意識	18	父祖	14	美術史
126	藝術	30	アジア	18	中心	14	匂ひ
117	詩人	29	戦争	18	少年	14	内村鑑三
114	世界	29	女性	18	純粹	14	情緒
111	表現	29	完成	18	自分	14	丈夫
103	天心	28	美觀	18	子規	14	上田敏
99	時代	27	文藝	18	現實	14	少女
99	意味	27	鎌倉	18	記事	14	事件
91	文化	26	血統	18	我國	14	支配
89	王朝	25	關係	18	永久	14	指導
88	天平	25	藝文	18	わが國	14	御製
82	作品	25	透谷	17	體系	14	記録
76	日本武尊	25	光榮	17	論理	14	翫弄
72	歴史	25	開花	17	相聞	14	レアール
72	文章	24	漱石	17	素樸	13	齋宮
69	自然	24	雄大	17	上代人	13	對象
62	近代	24	芭蕉	17	皇后	13	單純
61	發見	24	西洋	17	愛情	13	民衆
60	大津皇子	24	最後	16	氣持	13	片歌
57	不安	23	關心	16	國民	13	白鳳天平
53	人間	23	明星	16	唯一	13	日本史
53	現代	23	武士	16	未來	13	日本の橋
50	文學	23	美事	16	鳳凰堂	13	情熱
50	悲劇	23	存在	16	悲哀	13	考へ方
49	皇子	23	作家	16	説明	13	江戸
48	作者	23	建設	16	世界精神	13	御子
46	英雄	22	青春	16	神典時代	13	古典
44	傳統	22	氣質	16	瞬間	13	印度
42	天皇	22	心情	16	祭り	13	印象
42	鑑三	22	詩情	16	近世	13	伊勢
42	偉大	22	御歌	16	感傷	13	ヨーロツバ
41	物語	22	古代	16	影響	12	雜遊
40	樗牛	21	萬葉集	16	運命	12	理想
39	日本人	21	東洋	15	萬葉	12	崩御
39	自覺	21	造型	15	回想	12	描寫
39	鷗外	21	感動	15	浪人	12	表情
38	更級	21	完全	15	露骨	12	日露戦争
37	言葉	21	可能	15	不可能	12	大帝
35	生涯	20	藝術家	15	批評	12	足仲彦天皇
35	上代	20	武人	15	藤村	12	人工
35	決意	20	尊敬	15	代表	12	心理
35	綾足	20	絶望	15	進歩	12	場所
35	ことば	20	小説	15	支那	12	自由
35	あはれ	20	哀愁	15	古王朝	12	行爲
34	天才	19	鐵幹	15	さび	12	後世
34	思想	19	恵心僧都	14	發想	12	古語
33	勝利	19	創造	14	發生	12	原始
32	形式	19	生活	14	對立	12	系譜
31	白鳳	19	詩歌	14	民族	12	饗宴
31	言靈	19	御杖	14	雰圍氣		

### (1) 人名の概略

人名で頻度 12 以上には 20 名が挙がった。以下 ( ) 内数値は頻度とする。ただし「鑑三」はあらかじめ「内村鑑三 (14)」を加算し「鑑三 (56)」とした。

並べてみると、保田の後の著述に現れる歴史上の人名はある程度出そろっている。思想家 (天心や鑑三)、皇室 (日本武尊や大津皇子)、文学者 (高山樗牛)、詩人 (家持、芭蕉) などが頻出する。ただし、この著書の時代には後鳥羽院への言及が少なかったことが分かる。

#### 人名頻度合計 (672)

天心 (103)  
日本武尊 (76)  
大津皇子 (60)  
鑑三 (56)  
樗牛 (40)  
鷗外 (39)  
綾足 (35)  
宣長 (30)  
家持 (30)  
透谷 (25)  
漱石 (24)  
芭蕉 (24)  
鐵幹 (19)  
恵心僧都 (19)  
御杖 (19)  
子規 (18)  
藤村 (15)  
蕪村 (14)  
上田敏 (14)  
足仲彦天皇 (12)

この上位頻度 20 名の筆頭は天心 (103) で、これまでの調査による同容量テキスト『芭蕉』での人名・芭蕉 (327) に較べると 1/3 になり、このテキストの特徴として人名の低頻度がうかがえる。この事情は図書全体の主要対象とする歴史枠が「戴冠詩人の御一人者」の古代から、「明治の精神」という近代明治まで幅広く、言及内容が固有の人名に集中しないことにある。

付随して「戴冠詩人の御一人者」での主要人物「日本武尊」が文中では「尊」と扱われる事例が多いことから、書名に取られた日本武尊の頻度が低くなった。この「尊」という漢字一文字用例は、本稿ではそれを

自動的に日本武尊と確定することができないので外した。このことによって、主要人物「日本武尊」は頻度が 76 程度と、他に抜き出すことが無かった。

人名について、保田の文脈でどのような待遇を受けているかについて、イメージの具体化を図るために人物の活躍した時代で分類すると、次のようになる。ただしこれは表 1 から整理したものであるので、実数を表すのではなく、傾向を示している。

#### 神話古代【88】

日本武尊 (76)、足仲彦天皇 (12)

#### 古代～平安【109】

大津皇子 (60)、大伴家持 (30)、恵心僧都 (19)

#### 近世：江戸【122】

建部綾足 (35)、本居宣長 (30)、芭蕉 (24)、富士谷御杖 (19)、蕪村 (14)

#### 近代：明治【353】

岡倉天心 (103)、内村鑑三 (56)、高山樗牛 (40)、森鷗外 (39)、北村透谷 (25)、夏目漱石 (24)、与謝野鐵幹 (19)、正岡子規 (18)、島崎藤村 (15)、上田敏 (14)

人名からこのテキストをみると、その傾向は「明治時代について書かれた図書」と言ってよい。単純に比較してみると、明治時代人名【353】：それ以外の人名【319】となりテキストの半数以上が明治に生きた人物について描かれている可能性が強くなる。すなわち、書名の戴冠詩人が日本武尊を指すことは事実だが、量的には明治の人物について書かれているとなる。もちろん、そのことによって、詩人の御一人者である日本武尊の意味が減するわけではない。

### (2) 事項名 (作品・専門用語など) の概略と分類

表 1 に表れた用語を 7 つの項目と「その他」に分類し表 2 とした。この分類表に決定的な意味があるのではなく、図書内容の大凡の傾向がより明瞭になることから、従来の考察に沿って採用した。今回新たに導入した大分類項目は、「英雄と詩人」「心の様子」「現実世界」の三項目とした。また「文明歴史観」など他の分類項目は従来の分類項目をそのまま使った。

表2 用語の分類 (頻度 12 以上 210 用例 頻度数 6370)

2064	文明歴史観	35	あはれ	12	崩御	53	現代
372	日本	34	天才	12	理想	53	人間
244	精神	30	象徴	12	雑遊	29	女性
129	明治	28	美観			19	生活
114	世界	27	文藝	672	人名	18	現実
99	時代	25	藝文	103	天心	18	記事
91	文化	23	作家	76	日本武尊	17	體系
89	王朝	21	造型	60	大津皇子	17	論理
88	天平	20	藝術家	56	鑑三	14	對立
72	歴史	20	小説	40	樗牛	14	事件
62	近代	19	詩歌	39	鷗外	14	支配
49	皇子	19	創造	35	綾足	14	指導
44	傳統	17	相聞	30	宣長	14	記録
42	天皇	15	萬葉	30	家持	14	レアル
39	日本人	15	批評	25	透谷		
34	思想	15	さび	24	漱石	82	作品名
31	白鳳	14	御製	24	芭蕉	38	更級
30	アジア	14	美術史	19	鐵幹	23	明星
27	鎌倉	14	發想	19	恵心僧都	21	萬葉集
24	西洋	13	片歌	19	御杖		
21	東洋	13	古典	18	子規	631	その他
18	わが國	12	古語	15	藤村	61	發見
18	我國	12	描寫	14	燕村	32	形式
18	父祖			14	上田敏	29	完成
17	皇后	868	英雄と詩人	12	足仲彦天皇	25	關係
16	鳳凰堂	117	詩人			25	開花
16	世界精神	50	悲劇	619	心の様子	24	雄大
16	國民	46	英雄	99	意味	24	最後
16	祭り	42	偉大	57	不安	23	關心
16	近世	35	生涯	39	自覺	23	美事
15	支那	35	上代	35	決意	23	存在
15	古王朝	33	勝利	30	意識	21	完全
14	民族	31	言靈	25	光榮	21	可能
14	封建	29	戦争	22	氣質	19	見出
13	白鳳天平	26	血統	22	心情	18	變革
13	日本史	23	武士	21	感動	18	崩壞
13	齋宮	23	建設	20	尊敬	18	中心
13	日本の橋	22	詩情	20	絶望	16	影響
13	江戸	22	御歌	18	自分	16	唯一
13	伊勢	22	古代	17	素樸	16	未來
13	民衆	22	青春	17	愛情	16	説明
13	御子	20	武人	16	氣持	16	隣間
13	印度	20	哀愁	15	回想	15	不可能
13	ヨーロッパ	18	永久	15	露骨	15	代表
12	日露戦争	18	少年	14	雰圍氣	15	進歩
12	大帝	18	純粹	14	負目	14	發生
		17	上代人	14	匂ひ	14	翫弄
1057	文学芸術	16	神典時代	14	情緒	13	對象
126	藝術	16	悲哀	13	情熱	13	單純
111	表現	16	感傷	13	考へ方	12	人工
82	作品	16	運命	13	印象	12	場所
72	文章	15	浪人	12	表情	12	行爲
50	文學	14	丈夫	12	心理	12	後世
48	作者	14	少女	12	自由		
41	物語	12	原始				
37	言葉	12	系譜	377	現実世界		
35	ことば	12	饗宴	69	自然		

### ・文明歴史観 頻度総数 (2064)

保田の著作には従来より「文明観」「歴史観」用語が頻出する。

それを特徴付ける用語としては「日本、精神、明治、世界、時代、文化、王朝、天平、歴史」などがある。

### ・文学芸術 頻度総数 (1057)

通例はこの分類に「詩人」を納めるが、今回は分類項目に「英雄と詩人」を設定したので、文学芸術からは省いた。しかし萬葉 (15) はここに含めた。保田が萬葉集ではなく「萬葉」と使うときは古代・上代での詩的な風景や人心を表すことが多い。

### ・英雄と詩人 頻度総数 (868)

保田には著書『英雄と詩人』(昭和11年)がある。ナポレオンやヘルダーリンに関する評論集だが、本稿で選んだ分類項目「英雄と詩人」は、保田がみた英雄であり詩人の御一人者だった日本武尊の生涯を念頭においた。

### ・人名 頻度総数 (672)

先述したが人名の大多数は我が国明治時代の思想家、文人が中心である。近代国家の揺籃期における先人達の努力や工夫に、保田は深い関心を持っていることがわかる。

### ・心の様子 頻度総数 (619)

従来は「その他」に分類してきたが、本稿ではこの「心の様子」と次の「現実世界」とに言葉を分けた。ここには、「不安、自覚、決意、光栄」など昭和初期に流行したと思われる言葉が上位頻度にあるので、一種のテクニカルタームとして詳細を確かめる必要もあるが、このたびはこの粗い分類にとどめた。

### ・現実世界 頻度総数 (377)

その他に入れてきた用語のうち、精神世界に対置するもの、自然世界、現実世界に存在するものを個々に納めた。

### ・作品名 頻度総数 (82)

「更級日記、明星、萬葉集」の三点が上位にあがった。

## (3) 用語の傾向

表2の分類内容を図2の円グラフにした。この図2から本テキストでの用語頻度の傾向をまとめておく。

「文明歴史観 (32%)」、「文学芸術 (17%)」、「英雄と詩人 (14%)」の3つの大分類が上位をしめる。しかし、「英雄と詩人」と「文学芸術」は合わ

せて31%となり、この二つはより上位視点からは「文学芸術」>と観ても良い。すると、本テキストは「文明歴史観 (32%)」>と「文学芸術 (31%)」>の二つが合わさったものとも言える。『戴冠詩人の御一人者』は「武人・英雄」と「詩人」を等しくみる美学から成るが、保田の特徴とは「文明」と「文芸」が合わさったところにあると考えられる。

## 3. 2 事項と人物の認定

この項ではテキストに現れた多様な用語を正規化した。具体的には先述の大分類項目に現れた用語を、名寄せし、正確な頻度を計った。次に経験則からその上位17項目を選び、その内訳を表3とした。なお同一用例でも表1の大分類表と数値が異なるのは、ここでは正確な名寄せを行ったからである。

### (1) 事項・人物の名寄せについて

表3に表れた事項・人物は、表1から上位頻度の用語を抽出し、そこから人名、作品名、事項名を全体のバランスのもとで必要とする用語をとり、次に各用語に関連の深い別の用語を表1および全用語の中から拾った。この場合、拾う用語は頻度5以上のものとした。出来上がった全体表をさらに俯瞰し、必要に応じて新規の代表名を立てて、総計17用語として統合した。

たとえば表3では代表名、◎内村鑑三【56】とは、その内訳が「鑑三 (42)、内村鑑三 (14)」である。また表3中でのA、B、C、Dの区分けは用語群を俯瞰

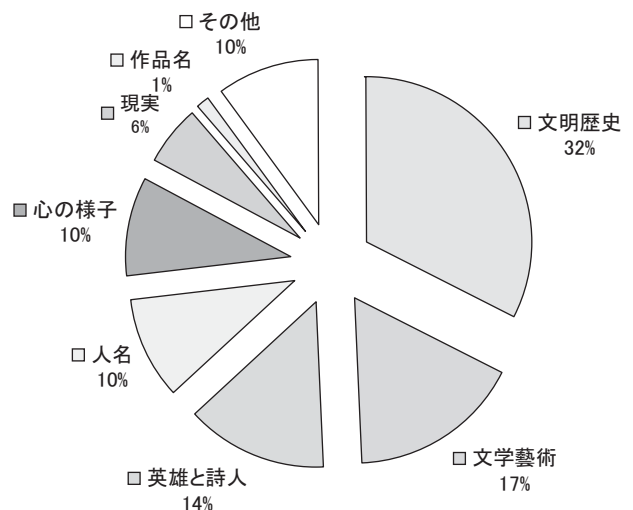


図2 『戴冠詩人の御一人者』用語の傾向

した時の目安である。

## (2) 事項・人物の概説

以下に名寄せした用語群のうち主要なものを、保田の引用とともに触れておく。

### -1 ◎岡倉天心【116】

保田は10章「明治の精神」冒頭で<二人の世界人>として、岡倉天心と内村鑑三をあげた。天心の日本の美術に対する貢献は、「法隆寺の発見」として銘記されることであった。

天心はそもそも初めに「世界史」と「世界」を発見してみた。このやうな雄大な明治の精神の實相は、尊敬すべき「歴史」の発見者たる日本の近世の國學者さへもたなかつた。何となれば明治の精神が世界を発見するについての事情のうちには、最も嚴肅な事實として「法隆寺の発見」があつたのである。それは日本の近世の歴史學者も知らないものであつた。天心は詩人の感受力を以て、一切の考證や記述を越えてまづ世界を體現した。(明治の精神：二人の世界人)

### -2 ○日本武尊【76】

戴冠詩人としての、第一人者を日本武尊とし、尊の生涯を記紀をもとに描いた。尊こそ我が国の英雄にして詩人であった。それは神話から歴史時代への架橋として、神から人への下降の悲劇として捉えられた。

日本武尊の悲劇の根本にあるものは、武人の悲劇である。神との同居を失ひ、神を畏れんとした日の悲劇である。言あげと言靈の關係をつくる、神を失つてゆく一時期の悲劇として、この説話は古事記中でも重大な意味を言靈したのである。こゝで尊は武人であり詩人であつた。日本の現代の文化史家たちは、神典時代の喪失の時期を考へない。(戴冠詩人の御一人者)

### -3 ○大津皇子【59】

天武天皇の死後刑死した大津皇子の謀反は冤罪とされている。この悲劇的皇子の像が奈良博物館で展示されていた頃の回想から始まる一文は珠玉である。

秋の日の暗い午後、といつてももう懐中電燈の光が部屋の中ではあかあかと見えるくらゐな、夕ぐれ近い時刻であつた。私は奈良博物館の第三室の南側の陳列箱の前にしばらくまへから立つてゐた。閉館まぎはの入場者たちはさうざうしくゆききし、その人影さへほのぐれてゐるので、私は全く呆然とこの一つの小さい作品のまへに佇んでゐる。見慣れた作品の中で初めて眼に止つた一つの作品であつた。晩秋のなほも心細く疲れた夕暮ゆゑか、その作品は私を感傷させた。しかもそれは何と哀愁に匂ふ作品であらう。大津皇子(おほつのみこ)像との説明をつけた、神像形の小さい、全く小さい作品であつた。(大津皇子の像)

### -4 ◎内村鑑三【56】

岡倉天心と同じく保田は「明治の精神」冒頭で<二

表3 人物・事項の名寄せ(表中の○印は単独用語、◎印は用語群の代表名を表す。)

#### A. 人名・分類

##### ◎岡倉天心【116】

天心 109

岡倉天心 7

##### ○日本武尊【76】

##### ○大津皇子【59】

##### ◎内村鑑三【56】

鑑三 42

内村鑑三 14

##### ○樗牛【40】(注：高山樗牛)

##### ○綾足【35】(注：建部綾足)

#### B. 文明歴史観・分類

##### ○明治の精神【40】

##### ○精神【205】

##### ○明治【90】

##### ◎王朝【110】

王朝 89

古王朝 15

王朝人 6

##### ◎天平【113】

天平 88

白鳳天平 13

天平的 7

天平當曼 5

#### C. 文学藝術・分類

##### ◎藝術【167】

藝術 126

藝術家 20

藝術批評 9

藝術的 7

大藝術 5

##### ◎文學【73】

文學 50

世界文學 7

文學者 6

國民文學 5

文學界 5

##### ◎物語【46】

物語 41

伊勢物語 5

#### D. 英雄と詩人・分類

##### ◎詩人【124】

詩人 118

戴冠詩人 6

##### ○悲劇【50】

##### ○英雄【46】

人の世界人>として、内村鑑三をあげた。欧米を感心させる基督者鑑三の姿勢は、同時に上州の土着性を色濃く持っていた。

鑑三の描いた思索には、しかしながら日本の詩があつた。恐らく彼の「信仰経過」が歐米の人々を深くひきつけたものは、反つて我々に不思議なくらゐである。我々には風土の匂ひがわかりすぎるせゐもあつた。その素樸剛健の精神の美しさには、上州のから風が運んでくる火山灰の匂ひさへ混入してゐるからである。(明治の精神：二人の世界人)

#### -5 ○樗牛【40】

「日本主義」で著名な高山樗牛に対して、保田は彼に明治期の先駆的詩人としての待遇を与えた。

樗牛もやはり日本になかつた傳統の變革者の一人であつた。古王朝を愛惜した彼も、その世界になかつた「丈夫ぶり」の表現を自得した。われらの長い傳統は耐へ耐へての果に戦ひに立つ、それを積極の叫びの丈夫ぶりに表現した近代先驅の一人であつた。平家滅亡の哀愁を歌つた彼は、近代ヒュマニズムを根柢としてゐた、やはり一人の先驅の「詩人」であつた。(明治の精神：みはしのさくら)

#### -6 ○綾足【35】

江戸時代、数奇な人生をたどつた建部綾足は「日本武尊へのひたぶるな尊崇はつひに能褒野建碑となつたのである。」とあるように日本武尊にあこがれ、古事記の片歌を愛惜した。

建部綾足はつひにたゞ、片歌復興に、古の皇子の英雄と詩人への嘆きを精神の形で描いた。

しかし綾足も秋成も共に少女の詩と英雄の抒情を了知した近代の詩人の心の始祖である芭蕉や馬琴と共に、形成こそ異なるが近世日本の浪漫家の始めの人である。(建部綾足)

#### -7 ○明治の精神【40】

保田の明治の精神とは、岡倉天心、内村鑑三、高山樗牛、森鷗外、夏目漱石らに代表される、世界・アジアの中での独立精神、固有の気概を示した用語である。

明治の精神はいはゞ日清日露の二役を戦ひ勝たねばならぬ精神であつた。天心が藝術上で賭けた廣大無邊の賭けは、又國をあげて賭けねばならぬことがらであつた。アジアは一般に舊世紀であり白人の植民地であるか、それに毅然として否と呼んだのは、天心であり鑑三であり、一般に明治の精神であつた、「世界のために、すべてが神のため」とは註するまでもないその心である。鑑三の唱へた日本人の信仰思念の自由のための無教會主義、外國宣教師排斥も同じ根柢をもつてゐた。(明治の精神：二人の世界人)

#### -8 ○天平【113】

保田が指す「天平」とは、「白鳳天平の精神」と考へることも出来る。さらに一つの時代区分が時代精神を表すことから、奈良時代全般の文化・政治全体を意味している。

白鳳天平といふ時代は、人麻呂に始まり家持に終る時代である。かういふ書き方が今の私の氣持に一等ふさふさである。しかしこの始めに大津皇子を加へ、中に旅人憶良を附けたし、さうして爛熟期を象徴する光明皇后を記録すればその時代の文化的性格はもつと明瞭となる。(白鳳天平の精神)

#### -9 ◎詩人【124】

保田による<詩人>とは歌を詠わずとも、その日常や生涯をもって「詩人」と評価することがある。保田からでる「詩人」とは一級の褒め言葉と考えて良い。

日本武尊が上代に於ける最も美事な詩人であり典型的武人であつたといふことは、僕らの英雄の血統、文化の歴史、ひいては文藝の光榮のために云はれることである。しかるに僕らの先人は、日本の血統をあまりにも尊重したために、この半ば傳説の色濃い英雄の、悲劇と詩については、明治の國民傳説の變革の中からも省略してゐた。(戴冠詩人の御一人者)

## 4 クラスタ分析

表3の人物・事項にまとめた用語群の位置情報をもとにした相互関係をクラスタ分析することで図3とした。この手法\*2については従来行ってきたものである。

### 4.1 事項・人物のクラスタ分析

この図3(事項・人物のクラスタ分析)は、用語の位置情報の隣接度計算から用語集合間の類似性を導き出している。これは4.2で後述する図4(文章地図)が用語の位置情報から、図書内での相互の位置パターンを二次元表示することとは異なる。

ここでは図3から各用語群の近似や収束状態をながめ、特に顕著なクラスタの解釈をする。まず単純で明瞭なクラスタと、蓋然的にしか指摘できないクラスタとが混在している。明瞭なクラスタの一つは◎日本武尊 {◎文學 {◎悲劇、◎英雄}、◎詩人} で、もう一つは内村鑑三 {高山樗牛、明治の精神} である。この二つは図3によってクラスタが浮かび上がっている。他方デンドログラムとして形はあるのだが、茫洋としてとらえどころのないものが、{◎岡倉天心、◎明治} ◎精神、である。また、クラスタの意味を計りがたいものとして、大津皇子 {建部綾足 {王朝、物語}} があり、これは今回保留した。

\*2 谷口敏夫「三島由紀夫『豊饒の海』」の分析に詳しく述べた。京都光華女子大学研究紀要 39 (2001) -42 (2004)



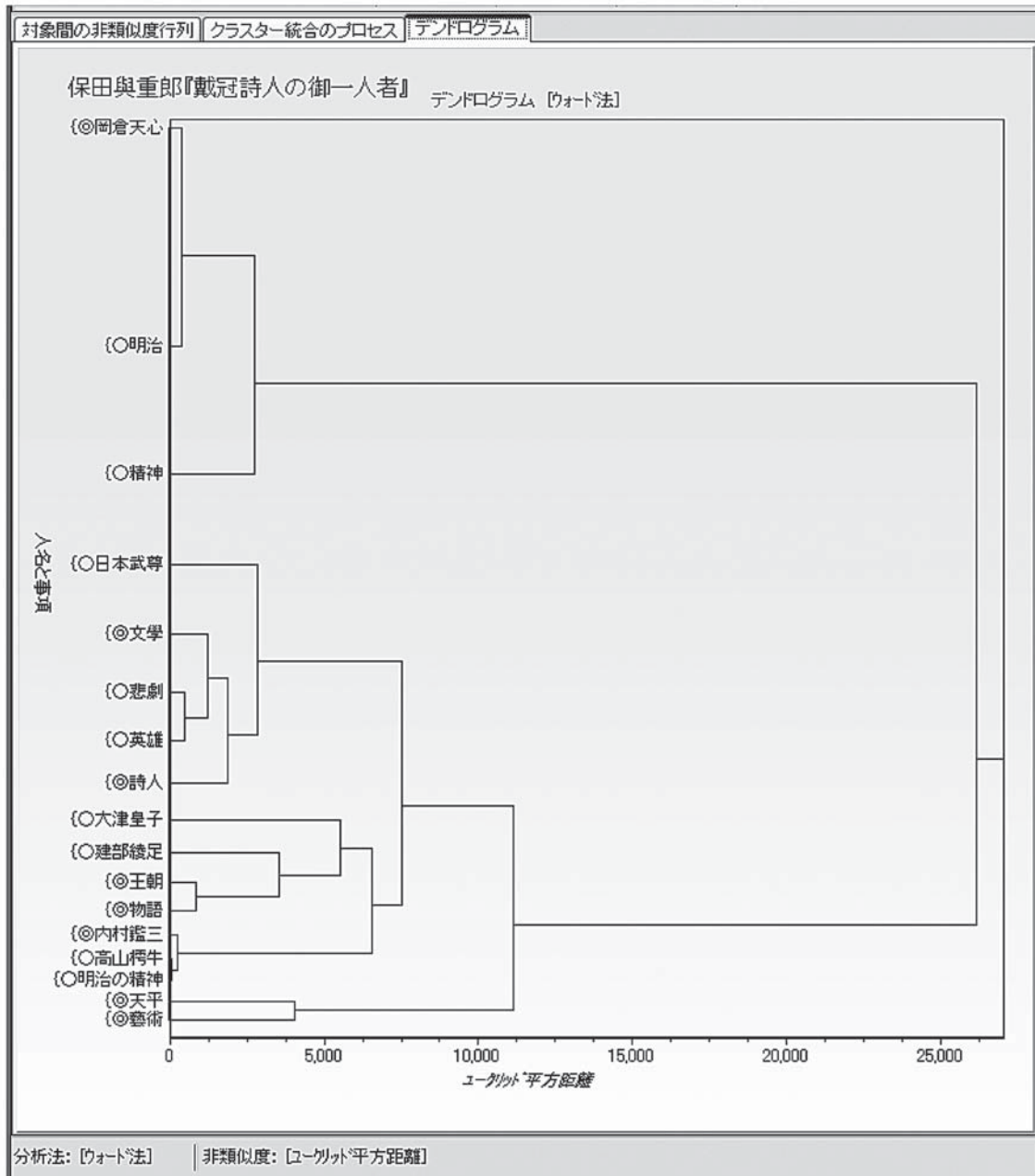


図3 事項・人物のクラスター分析

(1) ○日本武尊 {◎文学 {○悲劇、○英雄}、◎詩人}

保田にとっての日本武尊とは文学になりうる悲劇的英雄であった。すなわちそれは保田にとっての詩人を意味する。この事情の元で、『戴冠詩人の御一人者』の根本的なテーマを、このクラスターが明瞭に表している。言い換えるなら、英雄に悲劇があったとき、それは文学になり、それを表した者が詩人としての日本武尊である、となる。

尊はなすべきことをなし、あはれむべきものをあはれみ、かなしむべきものをかなしみ、それでゐる稟質としての美しい徒勞にすぎない永久にあこがれ、いつもなし終へないもの

を見てはそれにせめられてゐた。それはすぐれた資質のものの宿命である。このために言學しては罪におちた。しかし尊は詩人であつたから、その悲劇に意味があつた。まことに尊は戦ひのあとの地上の凱旋の如きを輕蔑してゐた。(戴冠詩人の御一人者)

(2) ◎内村鑑三 {高山樗牛、明治の精神}

基督者内村鑑三と日本主義者高山樗牛との接点は、以下の引用にある。

樗牛が「クオ・ヴァデイス」に感動したといふ事情は理解される。云ふまでもなくこの本の成立動機も知り、内容に描かれた二潮流についての知識も知つてゐたのである。樗牛は

それを論じて大歴史家に劣らぬ大作家の仕事を述べた、そして使徒の演説に何よりもさきに感動の限りを盡した。内村鑑三が外遊の旅鞆に入れて歸つたといふ一冊きりの小説本もこの「クオ・ヴァデイス」であつたといふ。(明治の精神：みはしのさくら)

世界精神と日本精神とが合わさったところに、明治の精神があつたといえる。

### (3) {◎岡倉天心、○明治} ○精神

岡倉天心の生きた明治は、どちらが主従というよりも、天心+明治時代という組みあわせによって、特異な精神世界が生まれたと絵解き出来るクラスター形成である。だがしかし、明治や精神という用語は範囲が広いものなので、この組みあわせは茫洋としたものに見える。

## 4. 2 文章地図(事項・人物)に表れた小概念

図4は、クラスター分析した結果から得た用語間の隣接の程度を、等高線(地図)の用語並びに適用したものである。具体的には、図4の右上端から表れる項目「◎岡倉天心、○明治、○精神、○日本武尊、～」以下の並びは、図3の左上端から下端に向けての項目並びから得たものである。すなわち、図4の横並び(X軸)は文章の通時性によって<0緒言>から<10明治の精神>までを一意に確定し、縦並び(Y軸)はクラスター分析の結果によって、用語位置の隣接度から用語群を並べたものである。この図4を、図書『戴冠詩人の御一人者』の文章地図として考えてみる。

その前に図3のクラスター分析によるデンドログラムと、図4で表された文章地図との相違は、これまでも述べてきたが重ねて説明する。まず図3の、統計手法の一つであるクラスター分析の結果は、テキスト中の比較的頻度の高い用語が、テキストの位置を基にしてどのくらい近・隣接して表れたかを示す。すなわち用語間の隣接度を得るための手法としてクラスター分析を使った。

次に、そのクラスター分析によってクラスター(隣接用語の組みあわせ)が表示されるが、そのクラスターそのものを詳細に分析するよりも、そこから得られた用語間の「列挙の様子」を得ることに主眼を置く。たとえば、「◎岡倉天心、○明治、○精神、○日本武尊、～」という列挙に注目するわけである。この列挙の順序は用語間の文章内の位置による相関係数によって導

かれたもので客観性を持つ。

以後図4に現れる用語の固まりは大海に浮かぶ島のようなものとして解釈を加える。

### (1) 文章地図全体の概略

図4を俯瞰してみると、x軸の章「1戴冠詩人の御一人者」はy軸の用語「詩人、大津皇子」という二つによって、章「2大津皇子の像」と深い関係を持つている。以下、章を略する。

「3白鳳天平の精神」と「4當麻曼荼羅」とは、いくつかの用語共有(共起)によって比較的近縁のものと言える。

「9饗宴の藝術と雑遊の藝術」と「10明治の精神」とは、いくつかの用語共有(共起)によって比較的近縁のものと言える。

以上のような概略が図4からわかるので、以下通時的分析と、共時的分析とを行う。

### (2) 文章地図の通時的分析

本論での通時的分析とは、テキストの冒頭から末尾にかけて、各章の順序を時系列と見なし、個々の用語ないし用語群(図4では縦並びに列挙された用語)の出現がどのような遷移を示したかを分析することである。各小編を便宜的に章として扱ってきたが、用語が特定章にどのくらい関与しているかをパターンから読み取ることができる。

<○精神>は、x軸章の1、3、4、7、8、9、10と合計7つの小編と関係しているので、このテキスト全体が通時的に「精神性」を重んじていることがわかる。<◎文學>が4章分、<◎詩人>が5章分、<◎王朝>が5章分、<◎藝術>が5~6章分と縁が深い。

こういった用語が通時的に関与していることから、概略として、精神的、文学的、詩的な王朝藝術を扱った図書という評価を出せるが、他の保田図書の分析からすると、特徴が弱い。また、精神、文學、藝術という用語は、保田の語彙においては一般語とも言えるので、それらが本テキストを特徴付けているとは必ずしも言い難い。

このテキストでは特異な固有の用語(たとえば日本武尊、内村鑑三、大津皇子)は一つないし二つの章に関連付けられている。そこにこのテキストの特徴がある。図書全体に通底する用語は、文學や芸術という一

般用語に多く、書名に代表される用語は、わずかな章に頻度を持つ。このことで最初に読んだ時の感動や、現在の読後感是非常に優れた印象があるが、分析的に詳細にみても、保田の後の作品に比較して、まだまだまとまりがなく散漫な印象も残った。その原因は、評論文の合冊の欠点を引きずっていると言える。ただし、集中いくつかの小篇は、「戴冠詩人の御一人者」をはじめとして、珠玉絶世の文章と言える。

### (3) 文章地図の共時的分析

次は共時的分析をみしてみる。これはある時点（すなわち、ある章ないし節）で、どのような用語群が共に出現（共起）しているのかという視点でみた分析である。以下に顕著な共起パターンを章の始めから順に見ていく。

「1 戴冠詩人の御一人者」では、{○精神、○日本武尊、○文學、○悲劇、○英雄、◎詩人} と6つの用語群の共起が明瞭になった。この用語群は、保田による究極の浪漫的英雄詩人・日本武尊を表すものとして、以後保田の晩年まで消えないひとつの概念であった。別の言い方をもってするなら、保田による文学精神、ないし美学とは、この用語群によって表されていると言って過言ではない。

またパターンで分かるように<○大津皇子>は「1 戴冠詩人の御一人者」と、<◎詩人>によって強い結合を見せている。大津皇子が優れた詩人であり英才であったにも関わらず、父天武天皇の崩御後、日をおくことなく謀反人とし刑死した悲劇は、日本武尊が父からの度重なる遠征命令の中で旅に死んだことと等値である。大津皇子は保田のいう日本武尊の系列に属する人であったと、明瞭である。

「3 白鳳天平の精神」と「4 當麻曼荼羅」では、二つの小編で {○精神、◎王朝、◎天平} と3つの用語群が共起し明瞭なパターンを表している。なお、この小篇「當麻曼荼羅」と折口信『死者の書』とは、中将姫伝説、大津皇子などの視点で縁が深い。

「5 齋宮の琴の歌」では、<◎王朝>が他の目立った用語と共起せず独立して現れている。内容は至極王朝的なものだが7頁の小品なので、用語の頻度を基礎に置く本稿方法論では対処しがたい。

「6 雲中供養佛」では、<◎藝術>だけが独立して

現れている。これは内容が宇治平等院鳳凰堂の天井回りに飛行する佛像に関して述べた小品である。現実の、宇治平等院・雲中供養佛は仏が持つ楽器の種類を数えるだけでも見飽きない逸品で、その価値は現代においても高い。

「7 更級日記」では、{○精神、◎文學、◎王朝、◎物語、◎藝術} と5つの用語が共起している。これは古典文学として妥当である。

「8 建部綾足」では、{○精神、○英雄、◎詩人、○建部綾足} が共起し、ここで英雄と詩人とがあるのは、建部の日本武尊への憧憬の表れと解釈できる。

「9 饗宴の藝術と雑遊の藝術」は以下の「明治の精神」に含まれるものと考えて良い。

「10 明治の精神」では、{◎岡倉天心、○明治、○精神、◎文學、◎詩人、◎王朝、◎内村鑑三、○高山樗牛、○明治の精神、◎藝術} と10の用語群が共起した。他の事例と比較すると突出した用語共起である。本テキストにおいての章としての重みが計られるパターンである。

### (4) その他の特異なパターン

こうして通時的、共時的に重要用語の出現パターンを分析してみると、「戴冠詩人の御一人者」と「明治の精神」によって一書を形成していると言える。つまり、テキスト『戴冠詩人の御一人者』は、冒頭論としての「1 戴冠詩人の御一人者」と終盤の「10 明治の精神」とによって包まれている。中身は、精神論、文学論、王朝物語論、天平時代、芸術論などがある。時代的には1章が神話時代で、10章が明治時代をさす。この1と10とでそれぞれ共起した用語群を加算すると、ほぼ上位の用語群と重なることがわかる。このことから、図書『戴冠詩人の御一人者』の主要なテーマは1章と10章とにあって、この二つの章は相補的である。これは図4の1章と10章との用語の島を加算したとき、感覚的に二つで一つという結論が得られ、特異なパターンと言える。

## 5 まとめ

本論では、まず3.1でテキストに用いられている事項・人名用語を粗く抽出し、おおよその傾向をみた。図2の円グラフからは、<文明歴史観>、と<文学芸

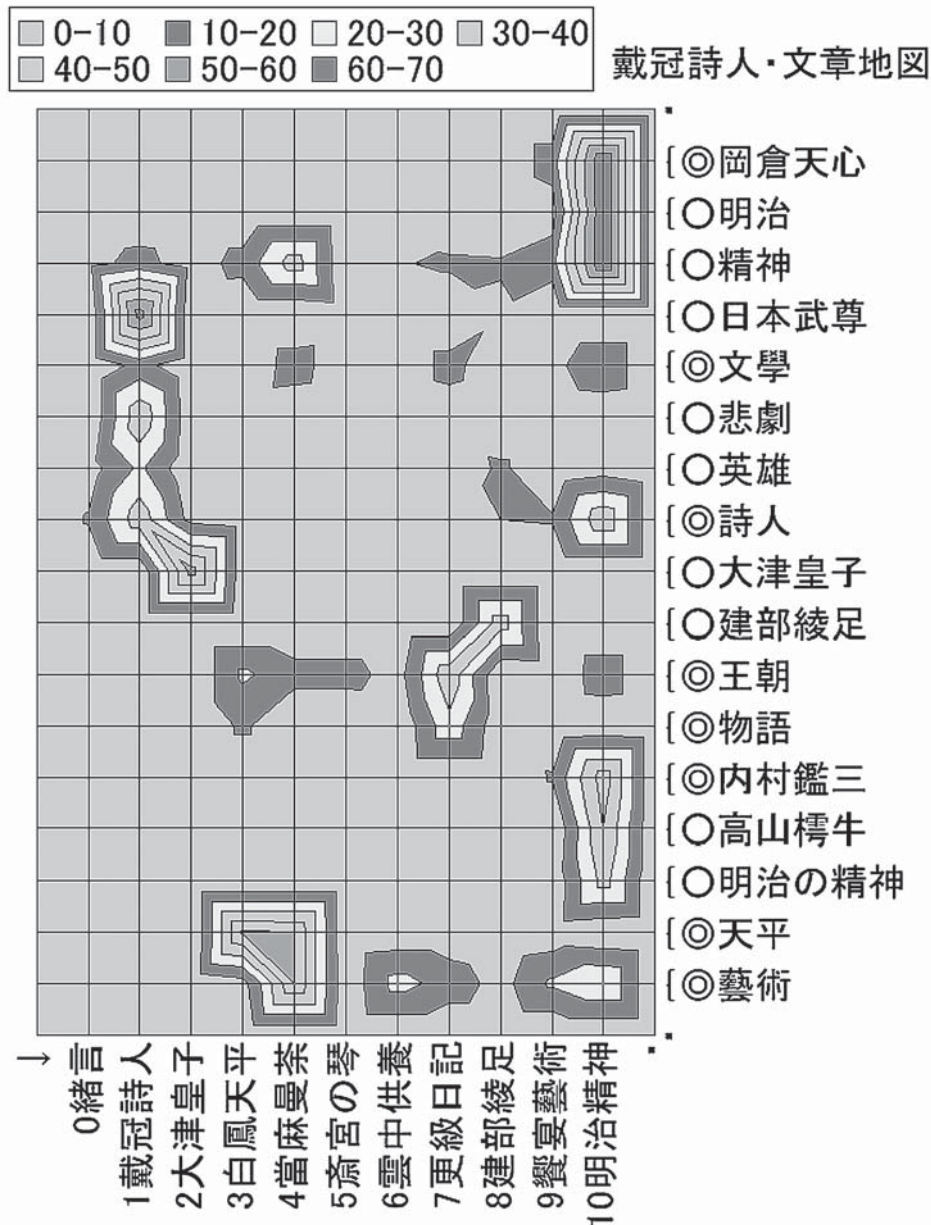


図4 文章地図（事項・人物）

術>+<英雄と詩人>の2つに大分類される用語をほぼ均等に使っていることがわかる。後世の保田の場合、文学・文芸そのものよりも、歴史的叙述が多いことは分かっているが、それは保田が20代に上梓した図書でも同じ傾向であるといえる。用語上位にあがる人名については10%と頻度は低かった。

次に3.2では、この事項や人物の詳細な異同を調べ、事項・人名を表3にまとめた。これは表1で単独の頻度が12以上の用語を意味的に精査してまとめたものである。結果として、下記A、B、C、Dの4分野か

ら合計で17件の用語（群）を選択し、内訳も示した。その用語集の代表名を以下に再掲した。◎は用語群で、○は単一用語、()内は正規化を施した後の頻度である。

#### A. 人名・分類

- ◎岡倉天心 【116】
- 日本武尊 【76】
- 大津皇子 【59】
- ◎内村鑑三 【56】
- 樗牛 【40】

- 綾足【35】
- B. 文明歴史観・分類**
- 明治の精神【40】
- 精神【205】
- 明治【90】
- ◎王朝【110】
- ◎天平【113】
- C. 文学藝術・分類**
- ◎藝術【167】
- ◎文學【73】
- ◎物語【46】
- D. 英雄と詩人・分類**
- ◎詩人【124】
- 悲劇【50】
- 英雄【46】

4.1 ではこの 17 件の用語群をクラスター分析した。方式としてユークリッド平方距離及びワード法により、テキスト中での用語間の距離を示したデンドログラムを得、これを図 3「事項・人物のクラスター分析」とした。

図 3 からは、○日本武尊 {◎文學 {○悲劇、○英雄}、◎詩人}、というクラスターが『戴冠詩人の御一人者』の基本的なテーマであることが鮮明に現れた。他のクラスター、◎内村鑑三 {高山樗牛、明治の精神} によって保田の考える明治の精神を表したが、クラスター {◎岡倉天心、○明治} ○精神、については感性的には分かるが精神という抽象的な用語によって、クラスターの性格が茫洋としたものとなり、判断解釈を保留した。

最後に 4.2 で、同じ 17 件の用語群を地図化し図 4 を得た。従来通り、文章中の用語頻度を等高線であらわす「文章地図化」の要点は、テキストという時系列にそった流れ（順序）を章立てで一意に確定し、用語群の配列をクラスター分析によって、すなわち用語の位置情報から用語間の類似・近接度を計算し、その結果で対象用語群を並べる方法を取った。この方法でテキストの可視化が計られ、図 4 からいくつかの明確なパターンを得た。

図 4 からは、テキスト『戴冠詩人の御一人者』は、冒頭論「戴冠詩人の御一人者」によって神話時代を、「明治の精神」によって近代明治を表し、その間一貫した精神、文学、詩人、藝術像による日本の美学を編んだ

という結論を得た。しかし個々の小篇は珠玉の作品といえるが、一書としてのまとまりは欠いた。これは青年期の通弊であり、同時にこの『戴冠詩人の御一人者』は、断片的に鋭利な精神によって描かれた、古代の日本武尊が顕彰された図書、すなわち我が国の青春文学であったと、言える。

#### 謝辞

データの整理について、葛野図書倶楽部 2001・坂口昭代副長 2003 の助力に感謝します。(2011 年 9 月 24 日)

#### 追録

これまで保田與重郎の主要な作品を可視化してきたが、今回は一旦、三島由紀夫『豊饒の海』全四巻のまとめを行い、その完了を待って、これまで分析した保田作品の一括論考を行う予定である。

